

# こころ

夏目漱石

上 先生と私

一

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すことに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取つたので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金

の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の本人が氣に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分らなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になった。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分日数がある。それで鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変わりもしなかつた。したがつて一人ぼつちになつた私は別に恰好な宿を探す面倒もまたなかつたのである。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあつた。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇を一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶ

り返つた藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寝そべつてみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑沓の間に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私はふとした機会からその一軒の方に行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘を構えている人と違つて、各自に専有の着換場を拵えていないここいらの避暑客には、ぜひともうした共同着換所といった風なものが必要なのであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息

する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここ  
で鹹<sup>しお</sup>はゆい身体<sup>からだ</sup>を清めたり、ここへ帽子や傘<sup>かさ</sup>を  
預けたりするのである。海水着を持たない私  
にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海  
へはいるたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄<sup>す</sup>てる  
事<sup>こと</sup>にしていた。

## 二

わたくし  
私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生が  
ちようど着物を脱いでこれから海へ入ろうと  
するところであつた。私はその時反対に濡<sup>ぬ</sup>れ  
た身体<sup>からだ</sup>を風に吹かして水から上がつて来た。  
二人の間<sup>あいだ</sup>には目を遮<sup>さへぎ</sup>る幾多の黒い頭が動いて  
いた。特別の事情のない限り、私はついに先生  
を見逃したかも知れなかつた。それほど浜辺  
が混雑し、それほど私の頭が放漫<sup>ほうまん</sup>であつたにも  
かかわらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、  
先生が一人の西洋人を伴<sup>つ</sup>れていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋  
へ入るや否<sup>いな</sup>や、すぐ私の注意を惹<sup>ひ</sup>いた。純粹の  
日本の浴衣<sup>ゆかた</sup>を着ていた彼は、それを床几<sup>しょうぎ</sup>の上に  
すぼりと放<sup>ほう</sup>り出したまま、腕組みをして海の方  
を向いて立っていた。彼は我々の穿<sup>は</sup>く猿股<sup>さるまた</sup>一  
つの外<sup>ほか</sup>何物も肌に着けていなかった。私には  
それが第一不思議だつた。私はその二日前に  
由井<sup>ゆい</sup>が浜<sup>はま</sup>まで行つて、砂の上にしゃがみながら、  
長い間西洋人の海へ入る様子を眺<sup>なが</sup>めていた。  
私の尻<sup>しり</sup>をおろした所は少し小高い丘の上で、そ  
のすぐ傍<sup>わき</sup>がホテルの裏口になつていたので、私  
の凝<sup>じつ</sup>としてゐる間<sup>あいだ</sup>に、大分多くの男が塩を浴び  
に出て来たが、いずれも胴と腕と股<sup>もも</sup>は出して  
なかつた。女は殊更<sup>いひなほ</sup>肉を隠しがちであつた。  
大抵は頭に護謨<sup>ゴム</sup>製の頭巾<sup>ずきん</sup>を被<sup>かぶ</sup>つて、海老茶<sup>えびちや</sup>や紺<sup>こん</sup>  
や藍<sup>あい</sup>の色を波間に浮かしていた。そういう有  
様を目撃したばかりの私の眼<sup>め</sup>には、猿股一つで

済まして皆みんなの前に立つているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍わきを顧みて、そこにごんでいる日本人に、一言二言何かいった。その日本人は砂の上に落ちた手拭てぬぐいを拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿を見守っていた。すると彼らは真直まっすぐに波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅とのおさかの磯近くいそちかにわいわい騒いでいる多人数たにんずの間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行つた。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体からだ

を拭ふいて着物を着て、さつさどこへか行つてしまつた。

彼らの出て行つた後、私はやはり元の床しょうど几こに腰をおろして烟草タバコを吹かしていた。その時私はぼかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかつた。しかしどうしてもいつどこで会つた人か想い出せずになつた。

その時の私は屈托くつたくがないというよりむしろ無聊ぶりょうに苦しんでいた。それで翌日あくるひもまた先生に会つた時刻を見計らつて、わざわざ掛茶屋かけぢやまで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽むぎわらぼうを被かぶつてやつて来た。先生は眼鏡めがねをとつて台の上に置いて、すぐ手拭てぬぐいで頭を包んで、すたすた浜を下りて行つた。先生が昨日きのうのように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後あとが追ひ掛けたく

なつた。私は浅い水を頭の上まで跳かして相  
当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に  
ぬきで  
抜手を切つた。すると先生は昨日と違つて、一  
種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り  
始めた。それで私の目的はついに達せられな  
かつた。私が陸へ上がつて雫の垂れる手を振  
りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと  
着物を着て入れ違いに外へ出て行つた。

### 三

私は次の日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔  
を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返  
した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶を  
する場合も、二人の間には起らなかつた。その  
上先生の態度はむしろ非社交的であつた。一  
定の時刻に超然として来て、また超然と歸つて  
行つた。周囲がいくら賑やかでも、それにはほ  
とんど注意を払う様子が見えなかつた。最初

いつしよに來た西洋人はその後まるで姿を見  
せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或る時先生が例の通りさつきと海から上が  
つて来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着  
ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂  
がいつぱい着いていた。先生はそれを落すた  
めに、後ろ向きになつて、浴衣を二、三度振  
つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が  
板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ  
兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなつたのに氣  
が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。  
私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ツ込んで眼鏡  
を拾ひ出した。先生は有難うといつて、それを  
私の手から受け取つた。

次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込  
んだ。そうして先生といつしよの方角に泳い  
で行つた。二三ほど沖へ出ると、先生は後ろを

振り返って私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外になかった。そうして強い太陽の光が、目の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂った。先生はまたぱたりと手足の運動をやめて仰向けになったまま浪の上に寝た。私もその真似をした。青空の色がざらざらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といって私を促した。比較的強い体質をもった私は、もつと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中二日おいてちようど三日目の午後だつたと思う。先生と掛茶屋で出会つた時、先生は突然私に向かつて、「君はまだ大分長くここにいるつもりですか」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「どうだか分りません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなつた。「先生は？」と聞き返さずにはいられなかった。これが私の口を出た先生という言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通の旅館と違つて、広い寺の境内にある別荘のような建物であつた。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解つた。私が先生

先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。

私はそれが年長者に対する私の口癖くちくせだといって弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉かまくらにいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際つきあいをもたないのに、そういう外国人と近付ちかづきになったのは不思議だといったりした。私は最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないといった。若い私はその時暗あんに相手も私と同じような感じを持つてはいはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟ちんぎんしたあとで、「どうも君の顔には見覚えみおぼがありませんね。人違いじゃないですか」といったので私は変に一種の失望を感じた。

#### 四

私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地わたくしを引き上げたのはそれよりずっと前であつた。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅たくへ伺つても宜よござんすか」と聞いた。先生は単簡たんかんにただ「ええいらつしやい」といっただけであつた。その時分の私は先生とよほど懇意になつたつもりでいたので、先生からもう少し濃こまやかな言葉を予期して掛かつたのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷いためた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあつた。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかつた。むしろそれとは反対で、不安に揺うごかされるたびに、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼

の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日こんにちになつて、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌つていたのではなかつたのである。先生が私に示した時々そつけの素気ない挨拶あいさつや冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰つて来た。帰ってから授業の始まるまでにはま

だ二週間の日数があるので、そのうちに一度行つておこうと思つた。しかし帰つて二日三日と経つうちに、鎌倉にいた時の気分が段々薄くなつて来た。そうしてその上に彩られる大都會の空氣が、記憶の復活に伴う強い刺戟と共に、濃く私の心を染め付けた。私は往来で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まつて、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛みができてきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始めた。物欲しうに自分の室の中を見廻した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなつた。

始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚え



ている。晴れた空が身に沁み込むように感ぜられる好い日和であった。その日も先生は留守であった。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅にいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかった私は、その言葉を思い出して、理由もない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇してそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内へはいった。すると奥さんらしい人が代つて出て来た。美しい奥さんであった。

私はその人から鄭寧に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。「たつた今出たばかりで、十

分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうにいつてくれた。私は会釈して外へ出た。賑かな町の方へ一丁ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行つてみる氣になった。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵を回らした。

## 五

私は墓地の手前にある苗畠の左側からはいつて、両方に楓を植え付けた広い道を奥の方へ進んで行つた。するとその端れに見える茶店の中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡の縁が日に光るまで近く寄つて行つた。そうして出し抜けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まつて私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍繰り返した。その言

葉は森閑とした昼の中に異様な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも応えられなくなつた。

「私の後を跟けて来たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。けれどもその表情の中には判然いえないような一種の曇りがあつた。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰の墓へ参りに行つたか、妻がその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおつしやいません」

「そうですか。——そう、それはいうはずがありませんね、始めて会つたあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心したらしい様子であつ

た。しかし私にはその意味がまるで解らなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのという傍に、一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが建ててあつた。全権公使何々というのもあつた。私は安得烈と彫り付けた小さい墓の前で、「これは何と読むでしょう」と先生に聞いた。「アンドレとでも読ませるつもりでしょうね」といつて先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしかった。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりにかれこれいいがるのを、始めのうちは黙つて聞いていたが、しまい「あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事ありませんね」といつた。私は黙

つた。先生もそれぎり何ともいわなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏いちょうが一本空を隠すように立つていた。その下へ来た時、先生は高い梢こずえを見上げて、「もう少しすると、綺麗きれいですよ。この木がすっかり黄葉こうようして、ここいらの地面は金色きんいろの落葉で埋まるようになります」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであつた。

向うの方で凸凹でこぼこの地面をならして新墓地を作っている男が、鋤くわの手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的あてのない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生はいつともより口数くしうを利きかなかつた。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶらいつしよに歩いて行つた。

「すぐお宅たくへお帰りですか」

「ええ別に寄る所ありませんから」

二人はまた黙つて南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですかと私がまた口を利き出した。

「いいえ」

「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」

「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかつた。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ちやうほど歩いた後あとで、先生が不意にそこへ戻つて来た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「お友達のお墓へ毎月まいげつお参りをなさるんですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかつた。

## 六

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くと共に先生は在宅であつた。先生に会う度数が重なるにつれて、私はますます繁く先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶をした時も、懇意になつたその後、あまり変りはなかつた。先生は何時も静かであつた。ある時は静か過ぎて淋しいくらいであつた。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思つてゐた。それでいて、どうしても近づかなければいられないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもつてゐたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかしその私だけにはこの直感が後になつて事実の上に証

拠立てられたのだから、私は若々しいといわれても、馬鹿げていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしくまた嬉しく思つてゐる。人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手をひろげて抱き締める事のできない人、——これが先生であつた。

今いつた通り先生は始終静かであつた。落ち付いてゐた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があつた。窓に黒い鳥影が射すように。射すかと思つと、すぐ消えるには消えたが。私が始めてその曇りを先生の眉間に認めたのは、雑司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れてゐた心臓の潮流をちよつと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結滞に過ぎなかつた。私の心は五分と経たないう

ちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗  
そうなこの雲の影を忘れてしまった。ゆくり  
なくまたそれを思い出させられたのは、小春の  
尽きるに間まのない或ある晩の事であつた。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ  
注意してくれた銀杏いちょうの大樹たいじゆを眼めの前に想おもひ浮  
かべた。勘定してみると、先生が毎月例まいげつれいとして  
墓参に行く日が、それからちょうど三日目に当  
つていた。その三日目は私の課業が午ひるで終おえ  
る楽な日であつた。私は先生に向かつてこう  
いった。

「先生ぞうし雑司がや谷の銀杏はもう散つてしまつたで  
しょうか」

「まだ空坊主からぼうずにはならないでしょう」

先生はそう答えながら私の顔を見守つた。  
そうしてそこからしばし眼を離さなかつた。

私はすぐいった。

「今度お墓参はかまいりにいらつしやる時にお伴ともをして  
も宜よござんすか。私は先生といつしよにあす  
こいらが散歩してみたい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじやな  
いですよ」

「しかしついでに散歩をなすつたらちようど好  
いじゃありませんか」

先生は何とも答えなかつた。しばらくして  
から、「私のは本当の墓参りだけなんだから」  
といつて、どこまでも墓参ぼさんと散歩を切り離そう  
とする風に見えた。私と行きたくない口実だ  
か何だか、私にはその時の先生が、いかにも子  
供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出  
る氣になつた。

「じゃお墓参りでも好いいからいつしよに伴つれて  
行つて下さい。私もお墓参りをしますから」

實際私には墓参と散歩との區別がほとんど

無意味のように思われたのである。すると先生の眉がちよつと曇った。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられない微かな不安らしいものであった。私は忽ち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだったのである。

「私は」と先生がいった。「私はあなたに話す事のできないある理由があつて、他といつしよにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴れて行つた事がないのです」

## 七

私は不思議に思つた。しかし私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかつた。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであつた。

私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまつたらう。若い私は全く自分の態度を自覺していなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は突然私に向かつて聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやつて来るのですか」

「何でといって、そんな特別な意味はありません。——しかし邪魔なんですか」

「邪魔だとは思いません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲の極めて狭い事を知っていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆な私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。

「私は淋しい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそうたびたび来るのかといって聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかった。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳ですか」といった。

この問答は私にとってすこぶる不得要領のものであったが、私はその時底まで押さずに帰ってしまった。しかもそれから四日と経たないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否や笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といつて自分も笑った。

私は外の人からこういわれたらきつと癪に触ったろうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であった。癪に触らないばかりでなくかえって愉快だった。

「私は淋しい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃな

いですか。私は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打つかりたいのでしょうか……」

「私はちつとも淋しくはありません」

「若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅へ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会つてもおそろくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外の方を向いて今に手を広げなければならなくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくな

ります」

先生はこういつて淋しい笑い方をした。

## 八

幸いにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私は、この予言の中に含まれている明白な意義さえ了解し得なかった。私は依然として先生に会いに行つた。その内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利かなければならないようになった。

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇からいつて、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因かどうかは疑問だが、私の興味は往来で合う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会



った時、美しいという印象を受けた。それから  
会うたんびに同じ印象を受けない事はなかつ  
た。しかしそれ以外に私はこれといつてとく  
に奥さんについて語るべき何物もまたないよ  
うな気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特  
色を示す機会が来なかつたのだと解釈する方  
が正當かも知れない。しかし私はいつでも先  
生に付属した一部分のような心持で奥さんに  
対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書  
生だからという好意で、私を遇していたらしい。  
だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり  
二人はばらばらになつていた。それで始めて  
知り合いになつた時の奥さんについては、ただ  
美しいという外に何の感じも残っていない。  
ある時私は先生の宅で酒を飲まれた。そ  
の時奥さんが出て来て傍で酌をしてくれた。

先生はいつもより愉快そうに見えた。奥さん  
に「お前も一つお上がり」といって、自分の呑  
み干した盃を差した。奥さんは「私は……」と  
辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取つた。  
奥さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注  
いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奥さ  
んと先生の間に下のような会話が始まつた。

「珍らしい事。私に吞めとおつしやつた事は  
滅多にないのにね」

「お前は嫌いだからさ。しかし稀には飲むとい  
いよ。好い心持になるよ」

「ちつともならないわ。苦しいぎりで。でもあ  
なたは大変ご愉快そうね、少しご酒を召し上が  
ると」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでも  
というわけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好い心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると宜よござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋さむしくなく  
って好いから」

先生の宅は夫婦と下女げじよだけであつた。行く  
たびに大抵たいていはひそりとしていた。高い笑い声  
などの聞こえる試しはまるでなかつた。或る  
時ときは宅の中にいるものは先生と私だけのよう  
な気がした。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは  
私の方を向いていった。私は「そうですね」と  
答えた。しかし私の心には何の同情も起らな  
かつた。子供を持った事のないその時の私は、  
子供をただ蒼蠅うらぎいもののように考えていた。

「一人貰もらつてやろうか」と先生がいった。

「貰もらッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私  
の方を向いた。

「子供はいつまで経たつたつてできっこないよ」  
と先生がいった。

奥さんは黙っていた。「なぜです」と私が代  
りに聞いた時先生は「天罰だからさ」といつて  
高く笑つた。

## 九

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫  
婦の一对であつた。家庭の一員として暮した  
事のない私のことだから、深い消息は無論解わから  
なかつたけれども、座敷で私と対坐たいざしている時、  
先生は何かのついでに、下女げじよを呼ばないで、奥  
さんと呼ぶ事があつた。（奥さんの名は静しずとい  
つた）。先生は「おい静」といつでも襖ふすまの方を  
振り向いた。その呼びかたが私には優やさしく聞  
こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も

甚<sup>はなは</sup>だ素直であつた。ときたまご馳走<sup>ちそう</sup>になつて、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間に描<sup>えい</sup>き出されるようであつた。

先生は時々奥さんを伴<sup>つ</sup>れて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。私は箱根<sup>はこね</sup>から貰<sup>も</sup>つた絵端書<sup>えはがき</sup>をまだ持つてゐる。日光<sup>にっこう</sup>へ行つた時は紅葉<sup>もみじ</sup>の葉を一枚封じ込めた郵便も貰<sup>も</sup>つた。

當時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまずこんなものであつた。そのうちにたつた一つの例外があつた。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆<sup>いさか</sup>いらしかつた。先生の宅は玄関の次がすぐ座

敷になつてゐるので、格子<sup>こうし</sup>の前に立つていた私の耳にその言逆<sup>いさか</sup>いの調子だけはほぼ分つた。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音<sup>おん</sup>なので、誰だか判然<sup>はつきり</sup>しなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いてゐるようでもあつた。私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ歸つた。

妙に不安な心持が私を襲つて來た。私は書物を読んでも呑<sup>の</sup>み込む能力を失つてしまつた。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ來て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようといつて、下から私を誘つた。先刻<sup>さつぎ</sup>帯の間へ包<sup>くる</sup>んだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は歸つたなりまだ袴<sup>はかま</sup>を着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といつしよに麦酒ビールを飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であつた。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険のできない人であつた。

「今日は駄目だめです」といつて先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は気の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻さつぎの事が引ひつ懸かかつていた。肴さかなの骨が咽喉のどに刺さつた時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止よした方が好よかろうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかつた。

「実は先刻妻と少し喧嘩けんかをしてね。それで下くだら

ない神経を昂奮こうふんさせてしまつたんです」と先生がまたいつた。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかつた。

「妻が私を誤解するのです。それを誤解だといつて聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」

「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかつた。

「妻が考えているような人間なら、私だつてこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であつた。

## 十

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁ちようも

二丁もつづいた。その後で突然先生が口をきき出した。

「悪い事をした。怒つて出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀なものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから」

先生の言葉はちよつとそこで途切れたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移つて行つた。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のよう  
で少し滑稽だが。君、私は君の眼にどう映りま  
すかね。強い人に見えますか、弱い人に見えま  
すか」

「中位に見えます」と私は答えた。この答えは先生にとって少し案外らしかった。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

先生の宅へ帰るには私の下宿のついでを

るのが順路であつた。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが先生に済まないような気がした。「ついでにお宅の前までお伴しましょうか」といった。先生は忽ち手で私を遮つた。「もう遅いから早く帰りましたまゑ。私も早く帰つてやるんだから、妻君のために」

先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰つてから安心して寝る事ができた。私はその後も長い間この「妻君のために」という言葉を忘れなかつた。

先生と奥さんの間に起つた波瀾が、大したものではない事はこれでも解つた。それがまた滅多に起る現象でなかつた事も、その後絶えず出入りをして来た私にはほぼ推察ができた。それどころか先生はある時こんな感想すら私に洩らした。

「私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻さい以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかないと男と思ってくれています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間の一对いっついであるべきはずです」

私は今前後の行き掛りがを忘れてしまったから、先生が何のためにこんな自白を私にして聞かせたのか、判然はつきりいう事ができない。けれども先生の態度の真面目まじめであつたのと、調子の沈んでいたのとは、いまだに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」という最後の一句であつた。先生はなぜ幸福な人間といい切らないで、あるべきであると断わつたのか。私にはそれだけが不審であつた。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が

不審であつた。先生は事實はたして幸福なのだろうか、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心の中で疑うたぐらざるを得なかつた。けれどもその疑いは一時限りどこかへ葬ほうむられてしまった。

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向さしかいで話をする機会に出会つた。先生はその日横浜よこはまを出帆しゅっぽんする汽船に乗つて外国へ行くべき友人を新橋しんばしへ送りに行つて留守であつた。横浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃の習慣であつた。私はある書物について先生に話してもらう必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に対する礼義れいぎとしてその日突然起つた出来事であつた。先生はすぐ帰るから留守でも私に待っているよう

にといに残して行つた。それで私は座敷へ上がつて、先生を待つ間、奥さんと話をした。

## 十一

その時の私はすでに大学生であつた。始めて先生の宅へ来た頃から見るとずっと成人した氣でいた。奥さんとも大分懇意になつた後であつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向いで色々の話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまつた。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。しかしそれを話す前に、ちよつと断つておきたい事がある。先生は大学出身であつた。これは始めから私に知れていた。しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ歸つて少し経つてから始めて分つた。私はその時どうして遊んでいられるのかと思つた。

先生はまるで世間に名前を知られていない人であつた。だから先生の学問や思想については、先生と密切の關係をもっている私より外に敬意を払うもののあるべきはずがなかつた。それを私は常に惜しい事だといった。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、口を利いては濟まない」と答えるぎりで、取り合はなかつた。私にはその答えが謙遜過ぎてかえつて世間を冷評するようにも聞こえた。實際先生は時々昔の同級生で今著名になつていて誰彼を捉えて、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々してみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平氣でいるのが残念だつたからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方がありま

せん」といった。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解<sup>わか</sup>らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇気が出なかつた。

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。

「先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」

「あの人は駄<sup>だ</sup>目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」

「つまり下<sup>くだ</sup>らない事だと悟つていらつしやるんですしうか」

「悟るの悟らないのつて、——そりや女だからわたくしには解りませんけれど、おそらくそん

な意味じゃないでしょう。やつぱり何かやりたいのでしょうか。それでいてできないんです。だから気の毒ですわ」

「しかし先生は健康からいつて、別にどこも悪いところはないようじゃありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それでなぜ活動ができないんでしょう」

「それが解<sup>わか</sup>らないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元だけには微笑が見えた。外側からいえば、私の方がむしろ真面目<sup>まじめ</sup>だった。私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じゃなかつたんですよ。若い時はまるで違つていました。それが全く変



つてしまつたんです」

「若い時つていつ頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知つていらつしやつたんですか」

奥さんは急に薄赤い顔をした。

## 十二

奥さんは東京の人であつた。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知つていた。奥さんは「本當あじいうと合この子こなんですよ」といつた。奥さんの父親はたしか鳥取とっとりかどこかの出であるのに、お母さんの方はまだ江戸といつた時分じぶんの市ヶ谷いちがやで生れた女なので、奥さんは冗談半分そついつたのである。ところが先生は全く方角違にがたいの新潟県人であつた。だから奥さんがもし先生の書生時代を知つてゐるとすれば、郷里の關係からでない事は明らかで

あつた。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずにおいた。

先生と知り合いになつてから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々の問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何ものも聞き得なかつた。私は時によると、それを善意に解釈してもみた。年輩の先生の事だから、艶めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎つつしんでいるのだらうと思つた。時によると、またそれを悪くも取つた。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶つやっぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇氣がないのだらうと考えた。もつともどちらも推測に過ぎなかつた。そうしてどちらの推測の裏にも、

二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定していた。

私の仮定ははたして誤らなかつた。けれども私はただ恋の半面だけを想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとつて見惨みじめなものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまつた。

私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たともいえる二人の恋愛については、先刻さつきいつた通りであつた。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかつた。奥さんは慎みのために、先生はまた

それ以上の深い理由のために。

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或る時あ花時はなとき分に私は先生といつしよに上野うえのへ行つた。そうしてそこで美しい一対いっついの男女なんにょを見た。彼らは睦むつまじそうに寄り添つて花の下を歩いてゐた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙そばだてている人が沢山あつた。

「新婚の夫婦のようだね」と先生がいつた。

「仲が好よきそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかつた。二人の男女を視線の外ほかに置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。

「君は恋をした事がありますか」

私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかつた。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、冷評ひやかくしましたね。

あの冷評ひやかくのうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声こゑが交まじつていましょう」

「そんな風ふうに聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はずっと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解わかっていますか」  
私は急に驚かされた。何とも返事をしなかつた。

### 十三

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉うれしそうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかつた。

「恋は罪悪ですか」と私わたくしがその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かつた。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずです。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であつた。思いあたるようなものは何にもなかつた。

「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」

「目的物が無いから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思つて動きなくなるのです」

「今それほど動いちゃいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来た

じやありませんか」

「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」

「恋に上るのほ階段かいだんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異ことにしているように思われます」

「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお願いになれ

ば仕方がありませんが、私にそんな気の起つた事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかった。

「しかし気を付けないといけない。恋は罪惡なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生のいう罪惡という意味は朦朧もうろうとしてよく解わからなかった。その上私は少し不愉快になった。

「先生、罪惡という意味をもつと判然はつきりいつて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪惡という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実まことを話している氣でいた。ところが實際は、あなたを焦慮じちし

ていたのだ。私は悪い事をした」

先生と私とは博物館の裏から鶯溪うぐいすだにの方角に静かな歩調で歩いて行つた。垣の隙間すきまから広

い庭の一部に茂る熊笹くまざさが幽邃ゆうすいに見えた。

「君は私がなぜ毎月まいげつ雜司ヶ谷ぞうしがやの墓地に埋うまつてい

る友人の墓へ参るのか知っていますか」

先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問いに對して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が付いたようにこういつた。

「また悪い事をいつた。焦慮じょろせるのが悪いと思つて、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましよう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」

私には先生の話がますます解わからなくなつた。しかし先生はそれぎり恋を口にしなかつた。

#### 十四

年の若い私わたくしはややとすると一図いちずになりやすかつた。少なくとも先生の眼にはそう映つていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであつた。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであつた。

とどの詰まりをいえば、教壇に立つて私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りひとを守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたのであつた。

「あんまり逆上のぼせちやいけません」と先生がいつた。

「覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があつた。その自信を先生は肯うけがつてくれなかつた。

「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭いやになります。私は今のあなたからそれほどに思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」

「私はお気の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をばたばた点じていた椿つばきの花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺ながめる癖があつた。

「信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」

その時生垣いけがきの向うで金魚売りらしい声がした。その外ほかには何の聞こえるものもなかった。大通りから二丁ちようも深く折れ込んだ小路こうじは存外ぞんがい静かであつた。家の中はいつもの通りひっそりしていた。私は次の間まに奥さんのいる事を知っていた。黙って針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知っていた。しかし私は全くそれを忘れてしまった。

「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。

「私は私自身さえ信用していないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになっていのです。自分を呪のろうより外ほかに仕方がないのです」

「そうむずかしく考えれば、誰だつて確かなものはないでしょう」

「いや考えたんじゃない。やったんです。やっただで驚いたんです。そうして非常に怖くやつたんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿つて行きたかった。すると襖の陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間へ呼んだ。二人の間にどんな用事が起つたのか、私には解らなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ歸つて来た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺かれた返報に、残酷な復讐をするようになるものだから」

「そりやどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

私はこういう覚悟をもっている先生に対して、いうべき言葉を知らなかつた。

## 十五

その後私は奥さんの顔を見るたびに気になった。先生は奥さんに対して始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋常であつたから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合せなかつたから。

私の疑惑はまだその上にもあつた。先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を観察したりした結果なのだろうか。先生は坐つて考える質の人であつた。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐つて世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかつた。先生の覚悟は生きた覚悟らしかつた。火に焼けて冷却し切つた石造家屋の輪廓とは違つていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であつた。け

れどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれてゐるらしかつた。自分と切り離された他人の事実でなくつて、自身痛切に味わつた事実、血が熱くなつたり脈が止まつたりするほどの事実が、畳み込まれてゐるらしかつた。

これは私の胸で推測するがものはない。先生自身すでにそうだと告白してゐた。ただその告白が雲の峯のようであつた。私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽ひ被せた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解らなかつた。告白はぼうとしてゐた。それでいて明らかに私の神経を震わせた。

私は先生のこの人生觀の基点に、或る強烈な恋愛事件を仮定してみた。(無論先生と奥さんとの間に起つた)。先生がかつて恋は罪惡だといつた事から照らし合せて見ると、多少それが



てがかり  
手掛りにもなった。しかし先生は現に奥さん  
を愛していると私に告げた。すると二人の恋  
からこんな厭世えんせいに近い覚悟が出ようはずがな  
かった。「かつてはその人の前に跪ひざまずいたという  
記憶が、今度はその人の頭の上に足を載のせさせ  
ようとする」といった先生の言葉は、現代一般  
の誰彼たれかれについて用いられるべきで、先生と奥さ  
んの間には当てはまらないもののようでもあ  
った。

ぞうしがや  
雑司ヶ谷にある誰だれだか分らない人の墓、――

これも私の記憶に時々動いた。私はそれが先  
生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。  
先生の生活に近づきつつありながら、近づく事  
のできない私は、先生の頭の中にある生命いのちの断  
片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。  
けれども私に取ってその墓は全く死んだもの  
であった。二人の間にある生命いのちの扉を開ける

鍵かぎにはならなかった。むしろ二人の間に立つ  
て、自由の往来を妨げる魔物のようであった。

そうこうしているうちに、私はまた奥さんと  
差し向いで話をしなければならぬ時機が来  
た。その頃ころは日の詰つまつて行くせわしない秋に、  
誰も注意を惹ひかれる肌寒はださむの季節であった。先  
生ふきんの附近で盗難に罹かかつたものが三、四日続いて  
出た。盗難はいずれも宵の口であった。大し  
たものを持つて行かれた家うちはほとんどなかつ  
たけれども、はいられた所では必ず何か取られ  
た。奥さんは気味をわるくした。そこへ先生  
がある晩家を空あけなければならぬ事情がで  
きてきた。先生と同郷の友人で地方の病院に  
奉職しているものが上京したため、先生は外ほかの  
二、三名と共に、ある所でその友人に飯めしを食わ  
せなければならなくなった。先生は訳を話し  
て、私に帰ってくる間までの留守番を頼んだ。

私はすぐ引き受けた。

## 十六

私の行<sup>わだし</sup>つたのはまだ灯<sup>ひ</sup>の点<sup>つ</sup>くか点かない暮れ方であつたが、几帳<sup>きちようめん</sup>面な先生はもう宅<sup>うち</sup>にいなかった。「時間<sup>おく</sup>に後<sup>お</sup>れると悪いって、つい今しがた出掛<sup>で</sup>けました」といった奥<sup>おく</sup>さんは、私を先生の書齋<sup>しうし</sup>へ案内<sup>あんい</sup>した。

書齋<sup>しうし</sup>には洋机<sup>テール</sup>と椅子<sup>いす</sup>の外<sup>ほか</sup>に、沢山<sup>たくさん</sup>の書物<sup>しよぶつ</sup>が美しい背皮<sup>せがわ</sup>を並<sup>なら</sup>べて、硝子<sup>がらすこし</sup>越<sup>こ</sup>に電燈<sup>でんとう</sup>の光<sup>ひかり</sup>で照<sup>て</sup>らされていた。奥<sup>おく</sup>さんは火鉢<sup>ひばち</sup>の前に敷<sup>ふ</sup>いた座蒲団<sup>ざぶたん</sup>の上<sup>うへ</sup>へ私<sup>わたし</sup>を坐<sup>すわ</sup>らせて、「ちつとそこいらにある本<sup>ほん</sup>でも読<sup>よ</sup>んでいて下さい」と断<sup>ことわ</sup>つて出て行<sup>い</sup>つた。私はちようど主人<sup>しゆじん</sup>の帰<sup>かへ</sup>りを待<sup>まち</sup>ち受<sup>う</sup>ける客<sup>きやく</sup>のよ<sup>よ</sup>うな氣<sup>き</sup>がして済<sup>す</sup>まなかつた。私は畏<sup>かしこ</sup>まつたま<sup>ま</sup>ま烟草<sup>タバコ</sup>を飲<sup>の</sup>んでいた。奥<sup>おく</sup>さんが茶<sup>ちや</sup>の間<sup>ま</sup>で何か下女<sup>げじよ</sup>に話<sup>わ</sup>している声<sup>こゑ</sup>が聞<sup>きこ</sup>こえた。書齋<sup>しうし</sup>は茶<sup>ちや</sup>の間<sup>ま</sup>の縁側<sup>えんがは</sup>を突<sup>つ</sup>き当<sup>あた</sup>つて折<sup>を</sup>れ曲<sup>ま</sup>つた角<sup>かくど</sup>にあるの

で、棟<sup>むね</sup>の位置<sup>ちゐ</sup>からいうと、座敷<sup>ざしき</sup>よりもかえつて掛<sup>か</sup>け離<sup>はな</sup>れた静<sup>しず</sup>かさを領<sup>りやう</sup>していた。ひとしきりで奥<sup>おく</sup>さんの話<sup>わ</sup>し声<sup>こゑ</sup>が已<sup>や</sup>むと、後<sup>あと</sup>はしんとした。私は泥棒<sup>どろぼう</sup>を待<sup>まち</sup>ち受<sup>う</sup>けるよ<sup>よ</sup>うな心持<sup>こころもち</sup>で、凝<sup>じつ</sup>としな<sup>な</sup>がら氣<sup>き</sup>をどこかに配<sup>はい</sup>つた。

三十分<sup>さんじふふん</sup>ほどすると、奥<sup>おく</sup>さんがまた書齋<sup>しうし</sup>の入口<sup>いりぐち</sup>へ顔<sup>かほ</sup>を出<sup>で</sup>した。「おや」といつて、輕<sup>かろ</sup>く驚<sup>おどろ</sup>いた時<sup>とき</sup>の眼<sup>め</sup>を私<sup>わたし</sup>に向<sup>むか</sup>けた。そうして客<sup>きやく</sup>に來<sup>き</sup>た人<sup>ひと</sup>のよ<sup>よ</sup>うに鹿爪<sup>しかつめ</sup>らしく控<sup>ひか</sup>えている私<sup>わたし</sup>をおかしそうに見<sup>み</sup>た。

「それじゃ窮屈<sup>きうくつ</sup>でしょう」

「いえ、窮屈<sup>きうくつ</sup>じゃありません」

「でも退屈<sup>たいくつ</sup>でしょう」

「いいえ。泥棒<sup>どろぼう</sup>が來<sup>き</sup>るかと思<sup>おも</sup>つて緊張<sup>けいしやう</sup>しているから退屈<sup>たいくつ</sup>でもありません」

奥<sup>おく</sup>さんは手<sup>て</sup>に紅茶<sup>こうちや</sup>茶碗<sup>ちやわん</sup>を持<sup>も</sup>つたま<sup>ま</sup>、笑<sup>わら</sup>いな<sup>な</sup>がらそこ<sup>そこ</sup>に立<sup>た</sup>つていた。

「ここは隅っこだから番をするには好くありませんね」と私がいった。

「じゃ失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴。ご退屈だろうと思つて、お茶を入れて持つて来たんですが、茶の間で宜しければあちらで上げますから」

私は奥さんの後に尾いて書齋を出た。茶の間には綺麗な長火鉢に鉄瓶が鳴つていた。私はそこで茶と菓子のご馳走になつた。奥さんは寝られないといけないといつて、茶碗に手を触れなかつた。

「先生はやつぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」

「いいえ減多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌になるようです」

こういった奥さんの様子に、別段困つたものだという風も見えなかつたので、私はつい大胆

になつた。

「それじゃ奥さんだけが例外なんですか」

「いいえ私も嫌われている一人なんです」

「そりや嘘です」と私がいった。「奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」

「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」

「あなたは学問をする方だけあつて、なかなかお上手ね。空っぽな理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだともいわれるじゃありませんか。それと同等じ理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、この場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空の盃でよくああ飽きずに

けんしゅう  
献酬ができると思いますわ」

奥さんの言葉は少し手痛かつた。しかしその言葉の耳障みみざわりからいうと、決して猛烈なものではなかった。自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出すほどに奥さんは現代的でなかった。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。

## 十七

わたし  
私はまだその後あとにいうべき事をもっていた。けれども奥さんから徒らいたずらに議論を仕掛ける男のように取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗こうちやちやわんの底を覗のぞいて黙っている私を外そらさないように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？　一つ？　二つつ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数かずを聞いた。奥さんの態度は私に媚こびるというほどではなかったけれども、先刻さつきの強い言葉を力つとめて打ち消そうとする愛嬌あいぎように充ちていた。

私は黙つて茶を飲んだ。飲んでしまつても黙つていた。

「あなた大変黙り込んだね」と奥さんがいった。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなんて、叱しかり付けられそうですから」と私は答えた。

「まさか」と奥さんが再びいった。

二人はそれを緒口いとぐちにまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題にした。

「奥さん、先刻さつきの続きをもう少しわけて下さいますか。奥さんには空からな理屈と聞こえる

かも知れませんが、私はそんな上の空<sup>うわそら</sup>でいつて  
る事じゃないんだから」

「じゃおつしやい」

「今奥さんが急にいなくなつたとしたら、先生  
は現在の通りで生きていられるでしょうか」

「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生  
に聞いて見るより外<sup>ほか</sup>に仕方がないじやありませんか。  
私の所へ持つて来る問題じゃないわ」

「奥さん、私は真面目<sup>まじめ</sup>ですよ。だから逃げちゃ  
いけません。正直に答えなくっちゃ」

「正直よ。正直について私には分らないのよ」

「じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらつ  
しやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ  
奥さんに伺<sup>うかが</sup>つていい質問ですから、あなたに  
伺<sup>うかが</sup>います」

「何もそんな事を開き直つて聞かなくつても好<sup>い</sup>  
いじやありませんか」

「真面目くさつて聞くがものはない。分り切つ  
てるとおつしやるんですか」

「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなく  
なつたら、先生はどうなるんでしょう。世の中  
のどっちを向いても面白そうでない先生は、  
あなたが急にいなくなつたら後でどうなるで  
しょう。先生から見てじゃない。あなたから  
見てですよ。あなたから見て、先生は幸福にな  
るでしょうか、不幸になるでしょうか」

「そりや私から見れば分つています。（先生は  
そう思つていないかも知れませんが）。先生は  
私を離れれば不幸になるだけです。あるいは  
生きていられないかも知れませんか。そうい  
うと、己惚<sup>おのぼ</sup>になるようですが、私は今先生を人  
間としてできるだけ幸福にしているんだと信  
じていますわ。どんな人があつても私ほど先

生を幸福にできるものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」

「その信念が先生の心に好く映るはずだと私は思います」

「それは別問題ですわ」

「やつぱり先生から嫌われているとおっしゃるんですか」

「私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近頃では人間が嫌いになつているんでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃないませんか」

奥さんの嫌われているという意味がやつと私に呑み込めた。

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺激を与えた。それで奥さんはその頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。

私は女というものに深い交際をした経験のない迂闊な青年であつた。男としての私は、異性に對する本能から、憧憬の目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかつた。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然變る事が時々あつた。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえつて變な反撥力を感じた。奥さんに対した私にはそんな氣がまるで出なかつた。普通男女の間に横たわる思想の不公平という考えもほとんど起

らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもつと活動なさらないのだろうといつて、あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はあじやなかったんだって」

「ええいいました。実際あんなじゃなかったんですもの」

「どんなだったんですか」

「あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」

「それがどうして急に変化なすったんですか」

「急にじゃありません、段々ああなつて来たのよ」

「奥さんはその間始終先生といつしよにいらしたんでしょ」

「無論いましたわ。夫婦ですもの」

「じゃ先生がそう變つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」

「それだから困るのよ。あなたからそういわれると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」

「先生は何とおっしゃるんですか」

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取り合つてくれないんです」

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切らした。下女部屋にいる下女はことりと音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。

「あなたは私に責任があるんだと思つてやしま

せんか」と突然奥さんが聞いた。

「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいつて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまたいった。「それでも私は先生のためにでぎるだけの事はしているつもりなんです」

「そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」

奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注の水を鉄瓶に注した。鉄瓶は忽ち鳴りを沈めた。

「私はとうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なくいつて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありません、欠点はおれの方にあるだけだということです。そういわれると、私悲しくなつて仕様が

ないんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた。

## 十九

始め私は理解のある女性として奥さんに対していた。私がその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に変つて来た。奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かし始めた。自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それなのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあった。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われてゐるのだと断言した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられなかつた。



底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭いやになったのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折つても、その推測を突き留めて事実とする事ができなかった。先生の態度はどこまでも良人おつとらしかった。親切で優しくかった。疑いの塊かたまりりをその日その日の情合じやうあいで包んで、そつと胸の奥にしまっておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなたどう思つて？」と聞いた。「私からあなつたのか、それともあなたのいう人世じんせい観かんとか何とかいうものから、あなつたのか。隠さずいつて頂戴ちやうだい」

私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私は

そこに私の知らないあるものがあると信じていた。

「私には解わかりません」

奥さんは予期の外はずれた時に見る憐あわれな表情をその咄とつ嗟さに現わした。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌つていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘うそを吐つかない方かたでしよう」

奥さんは何とも答えなかった。しばらくしてからこういつた。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」

「先生がああいう風ふうになった源因げんいんについてですか」

「ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任

だけはなくなるんだから、それだけでも私大變  
樂になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

奥さんはいい洩<sup>ひざ</sup>つて膝の上に置いた自分の  
手を眺めていた。

「あなた判断して下すつて。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱<sup>しか</sup>られ  
るから。叱<sup>しか</sup>られないところだけよ」

私は緊張して唾<sup>つばき</sup>液を呑み込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大變仲の好<sup>い</sup>いお  
友達<sup>かた</sup>が一人あつたのよ。その方がちょうど卒  
業する少し前に死んだんです。急に死んだん  
です」

奥さんは私の耳に私語<sup>ささや</sup>くような小さな声で、  
「実は変死したんです」といった。それは「ど  
うして」と聞き返さずにはいられないようない

い方であつた。

「それっ切りしかいえないのよ。けれどもそ  
の事があつてから後<sup>のち</sup>なんです。先生の性質が  
段々變つて来たのは。なぜその方が死んだの  
か、私には解らないの。先生にもおそらく解つ  
ていないでしょう。けれどもそれから先生が  
變つて来たと思えば、そう思われない事もない  
のよ」

「その人の墓ですか、雜司<sup>ぞうしがや</sup>ヶ谷にあるのは」  
「それもいわない事になつてるからいいません  
しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そん  
なに変化できるものでしょうか。私はそれが  
知りたくって堪<sup>たま</sup>らないんです。だからそこを  
一つあなたに判断して頂きたいと思うの」

私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

## 二十

わたくし  
私は私のつらまえた事実の許す限り、奥さん

を慰めようとした。奥さんもまたできるだけ私によつて慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合つた。けれども私はもともと事の大根を攫おおねつかんでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂ただよう薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉皆すつかりは私に話す事ができなかった。したがつて慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、覚束おぼつかない私の判断に縋すがり付こうとした。

十時頃じゅうしころになつて先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐すわつてゐる私をそちのけにして立ち上がった。そうして格子こうしを開ける先生を

ほとんど出合であい頭に迎えた。私は取り残されながら、後あとから奥さんに尾ついて行つた。下女げじよだけは仮寝うたたねでもしていたとみえて、ついに出来なかつた。

先生はむしろ機嫌がよかつた。しかし奥さんの調子はさらによかつた。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜たまつた涙の光と、それから黒い眉毛まゆげの根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺ながめた。もしそれが詐いつわりでなかつたならば、（實際それは詐りとは思へなかつたが）、今までの奥さんの訴こたえは感傷を玩センチメントもてあそぶためにとくに私を相手に拵こしらへた、徒いたずらな女性の遊戯と取れない事もなかつた。もつともその時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかつた。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必

要もなかったんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合はりあいが抜けやしませんか」といった。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰つぶさせて気の毒だというよりも、せっかく来たのに泥棒がいらないくって気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそういういながら、先刻さつき出した西洋菓子さつの残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂たもとへ入れて、人通りの少ない夜寒よさむの小路こうじを曲折して賑にぎやかな町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから抽ひき抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実をいうと、奥さ

んに菓子もちを貰もらつて帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日よくじつ午飯ひるめしを食いに学校から帰ってきて、昨夜机の上に載のせて置いた菓子さつの包みを見ると、すぐその中からチョコレートとびいろを塗ぬつた鳶色とびいろのカステラを出して頬張ほおばつた。そうしてそれを食う時に、必竟ひつぎようこの菓子さつを私にくれた二人の男女なんにょは、幸福いふつひな一対として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅うちへ出ではいりをするついでに、衣服あつちの洗はい張りや仕立したて方かたなどを奥さんに頼んだ。それまで繻絆じゆばんというものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであった。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえつて退屈たいくつ凌しのぎになつて、結句けつこ身体からだの葉はだぐ

らしい事をいつていた。

「こりや手織りね。こんな地の好い着物は今まで縫った事がないわ。その代り縫い悪いのよそりやあ。まるで針が立たないんですもの。」

お蔭で針を二本折りましたわ」

こんな苦情をいう時ですら、奥さんは別に面倒くさいという顔をしなかった。

## 二十一

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。私の母から受け取った手紙の中に、父の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰つて来てくれと頼むように付け足してあつた。

父はかねてから腎臓を病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性であつた。その代り要心さえしていれば急変

のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかつた。現に父は養生のお蔭一つで、今日までどうかこうか凌いで来たように客が来ると吹聴していた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返つた。家内のものは軽症の脳溢血と思ひ違えて、すぐその手当をした。後で医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間があつた。私は学期の終りまで待つていても差支えあるまいと思つて一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんた。そのたびに一種の心苦しさを嘗めた私

は、とうとう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いかたがた先生の所へ行つて、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。

先生は少し風邪の気味で、座敷へ出るのが臆<sup>おっくう</sup>だといつて、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸から冬に入つて稀に見るような懐かしい和らかな日光が机掛けの上に射<sup>さ</sup>していた。先生はこの日あたりの好い室の中へ大きな火鉢を置いて、五徳の上に懸けた金盞から立ち上る湯気で、呼吸の苦しくなるのを防いでいた。「大病は好いが、ちよつとした風邪などはかえつて厭なものですね」といった先生は、苦笑しながら私の顔を見た。

先生は病氣という病氣をした事のない人であつた。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなくつた。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしよう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」  
「そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病に罹<sup>かか</sup>りたいと思つてる」

私は先生のいう事に格別注意を払わなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりや困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」

先生は奥さんと呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それを奥の茶筆筒か何かの抽出から出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧に重ねて、「そりやご心配ですね」といった。

「何遍も卒倒したんですか」と先生が聞いた。  
「手紙には何とも書いてありませんが。――そ

んなに何度も引ッ繰り返るものですか」

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなったのだという事が始めて私に解った。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいった。

「そうさね。私が代られれば代つてあげても好いが。――嘔気はきけはあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、大方ないでしょう」おおむね

「吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいった。

私はその晩の汽車で東京を立つた。

## 二十二

父の病気は思ったほど悪くはなかった。それでも着いた時は、床とこの上に胡坐あぐらをかいて、「み

んなが心配するから、まあ我慢してこう凝じようとしている。なにもう起きてもいいのさ」といった。しかしその翌日よくじつからは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまった。母は不承無性ふしょうぶしょうに太織ふとおりの蒲団ふとんを畳みながら「お父さんはお前が帰つて来たので、急に気が強くおなりなんだよ」といった。私には父の挙動わたくしがさして虚勢きよせいを張つているようにも思えなかった。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。

これは万一の事がある場合でなければ、容易に父母ちちははの顔を見る自由きの利かない男であつた。

妹は他国とくへ嫁よめいだ。これも急場の間に合うよ

うに、おいそれと呼び寄せられる女ではなかった。兄妹きょうだい三人のうちで、一番便利なのはやはり

書生しやうせいをしている私だけであつた。その私が母のいい付け通り学校の課業かぎょうを放り出して、休み前に帰つて来たという事が、父には大きな満足

であつた。

「これしきの病気に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山ぎやうさんな手紙を書くものだからいけない」

父は口ではこういつた。こういつたばかりでなく、今まで敷いていた床とこを上げさせて、いつものような元氣を示した。

「あんまり軽はずみをしてまた逆回さかへすといけませんよ」

私のこの注意を父は愉快そうにしかし極きわめて軽く受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように要心ようしんさえしていれば」

實際父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈めまいも感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもない

ので、私たちは格別それを氣に留めなかった。

私は先生に手紙を書いて恩借おんしやくの礼を述べた。正月上京する時に持参するからそれまで待つてくれるようにと断わつた。そうして父の病状の思つたほど險悪でない事、この分なら当分安心な事、眩暈も嘔氣はきけも皆無な事などを書き連ねた。最後に先生の風邪ふうじゃについても一言いちごんの見舞を附つけ加えた。私は先生の風邪を實際軽く見ていたので。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかった。出した後で父や母と先生の噂うわさなどをしながら、遙はるかに先生の書齋を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎茸しいたけでも持つて行つてお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸などを食うかしら」



「旨くはないが、別に嫌いな人もないだろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であつた。

先生の返事が来た時、私はちょっと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかった時、驚かされた。先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一というと私と先生の間に書信の往復がたびたびあつたように思われるが、事實は決してそうでない事をちよつと断わっておきたい。私は先生の生前にたつた二通の手紙しか貰つていない。その一通は今いうこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大変長いものである。

父は病気の性質として、運動を慎まなければならぬので、床を上げてからも、ほとんど戸外へは出なかった。一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万一を氣遣つて、私が引き添うように傍に付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑つて応じなかった。

## 二十三

私は退屈な父の相手としてよく将碁盤に向かった。二人とも無精な性質なので、炬燵にあつたまま、盤を櫓の上へ載せて、駒を動かすたびに、わざわざ手を掛蒲団の下から出すような事をした。時々持駒を失くして、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付け出して、火箸で挟み上げるといふ滑稽もあつた。

「碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いているか

ら、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤は好いね、こうして楽に差せるから。無精者には持つて来いだ。もう一番やろう」

父は勝った時は必ずもう一番やろうといった。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうといった。要するに、勝つても負けても、炬燵にあたつて、将碁を差したがる男であつた。始めのうちは珍しいので、この隠居いんきよじみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経つに伴つれて、若い私の気力はそのくらいな刺激で満足できなくなった。私は金や香車きやうしやを握つた拳こぶしを頭の上へ伸ばして、時々思い切つたあくびをした。

私は東京の事を考えた。そうして漲みなぎる心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動こどうを聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているよ

うに感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人おとなしい男であつた。他に認められるという点からいえばどつちも零れいであつた。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往来ゆきぎをした覚えのない先生は、歓楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭というのはあまりに冷ひややか過ぎるから、私は胸といい直したい。肉のなかに先生の力が喰くい込んでいるといつても、血のなかに先生の命が流れているといつても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさ

らに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになつて来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらひは下にも置かないように、ちやほやもてな<sup>もてな</sup>歓迎されるのに、その峠を定規ていぎ通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまひには有つても無くつても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持つて帰った。昔でいうと、儒者じゆしやの家へ切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかつた。無論私はそれを隠していた。けれども

元々身に着いているものだから、出すまいと思つても、いつかそれが父や母の眼に留とまつた。私はつい面白くなかつた。早く東京へ帰りたいなかつた。

父の病氣は幸い現状維持のままで、少しも悪い方へ進む模様は見えなかつた。念のためにわざわざ遠くから相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらつてもやはり私の知つてゐる以外に異状は認められなかつた。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといひ出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいつた。

「まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父がいつた。

私は自分の極きめた出立しゅったつの日を動かさなかつた。

た。

## 二十四

東京へ帰つてみると、松飾まつわさけはいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかった。

わたしは早速先生のうちへ金を返しに行つた。

例の椎茸しいたけもついでに持つて行つた。ただ出るのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれといひましたとわざわざ断つて奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあつた。鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持つて見て、輕いのに驚かされたのか、「こりや何の御菓子」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊たんぱくな小供こどもらしい心を見せた。

二人とも父の病氣について、色々掛念けねんの問い

を繰り返してくれた中に、先生はこんな事をいつた。

「なるほど容体ようたいを聞くと、今が今どうという事もないようですが、病氣が病氣だからよほど気をつけなといけません」

先生は腎臓じんぞうの病やまいについて私の知らない事を多く知つていた。

「自分で病氣に罹かかつていながら、氣が付かないで平氣でいるのがあの病の特色です。私の知つたある士官しかんは、とうとうそれでやられたが、全く嘘うそのような死に方をしたんですよ。何しろ傍そばに寝ていた細君さいくんが看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいといつて、細君を起したぎり、翌朝あくはもう死んでいたんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思つてたんだつていうんだから」

今まで樂天的に傾いていた私は急に不安になつた。

「私の父もそんなになるでしょうか。ならんともいえないですね」

「医者は何というのです」

「医者は到底治らないというんです。けれども当分のところ心配はあるまいともいうんです」

「それじゃ好いでしょう。医者がそういうなら

私の今話したのは氣が付かずにいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱暴な軍人なんだから」

私はやや安心した。私の變化を凝<sup>じつ</sup>と見ていた先生は、それからこう付け足した。

「しかし人間は健康にしろ病氣にしろ、どっちにしても脆<sup>もろ</sup>いものですね。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」

「先生もそんな事を考えてお出<sup>いで</sup>ですか」

「いくら丈夫の私でも、満更<sup>まんざら</sup>考えない事もあり

ません」

先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」

「不自然な暴力つて何ですか」

「何だかそれは私にも解<sup>わか</sup>らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」

「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭<sup>かげ</sup>ですね」

「殺される方はちつとも考えていなかった。なるほどそういえばそうだ」

その日はそれで帰つた。帰つてからも父の病氣はそれほど苦にならなかつた。先生のいつた自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後は何らのこだわりを私の頭に残さな

った。私は今まで幾度か手を着けようとして  
は手を引つ込めた卒業論文を、いよいよ本式に  
書き始めなければならないと思ひ出した。

## 二十五

その年の六月に卒業するはずの私は、ぜひと  
もこの論文を成規通り四月いっぱい書き上  
げてしまわなければならなかつた。二、三、四  
と指を折つて余る時日を勘定して見た時、私は  
少し自分の度胸を疑つた。他のものはよほど  
前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、  
余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはま  
だ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が  
改まつたら大いにやろうという決心だけがあ  
つた。私はその決心でやり出した。そうして  
忽ち動けなくなつた。今まで大きな問題を空  
に描いて、骨組みだけはほぼでき上つていくく  
らいに考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。

私はそれから論文の問題を小さくした。そう  
して練り上げた思想を系統的に纏める手数を  
省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、  
それに相当な結論をちよつと付け加える事に  
した。

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近  
いものであつた。私がかつてその選択につい  
て先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしやう  
といつた。狼狽した気味の私は、早速先生の所  
へ出掛けて、私の読まなければならない参考書  
を聞いた。先生は自分の知つてゐる限りの知  
識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物  
を、二、三冊貸そうといつた。しかし先生はこ  
の点について毫も私を指導する任に当らうと  
しなかつた。

「近頃はあんまり書物を読まないから、新しい  
事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が

好いでしょ」

先生は一時非常の読書家であつたが、その後どういふ訳か、前ほどの方面に興味が働かなくなつたようだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思ひ出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味をもち得ないんですか」

「なぜという訳ありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならないと思ふせいでしょう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らない恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理

にも本を読んでみようという元氣が出なくなつたのでしょう。まあ早くいえば老い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦味くみを帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手応えてごたもなかった。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰つた。

それからの私はほとんど論文に崇たたられた精神病者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前ぜんに卒業した友達について、色々様子を聞いてみたりした。そのうちの一人は締切しめきりの日に車で事務所へ馳かけつけて漸やく間に合わせたといった。他の一人は五時を十五分ほど後おくらして持つて行つたため、危あやうく跳はね付けられようとしたところを、主任教授の好意でやつと受理してもらつたといった。私は不安を感じずと

共に度胸を据えた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫にはいつて、高い本棚のあちらこちらを見廻した。私の眼は好事家が骨董でも掘り出す時のように背表紙の金文字をあざった。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向を南へ更えて行つた。それが一仕切経つと、桜の噂がちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭うたれた。私はついに四月の下旬が来て、やっと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居を跨がなかつた。

## 二十六

私の自由になつたのは、八重桜の散つた枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であつた。私は籠を抜け出した小鳥の心をもつて、広い天地を一目に見渡しながら、

自由に羽搏きをした。私はすぐ先生の家へ行った。枳殻の垣が黒ずんだ枝の上に、萌るような芽を吹いていた、柘榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかそうに日光を映していたりするのが、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍しさを覚えた。

先生は嬉しそうな私の顔を見て、「もう論文は片付いたんですか、結構ですね」といった。私は「お蔭でようやく済みました。もう何にもする事はありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべきすべての仕事ですでに結了して、これから先は威張つて遊んでいても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋々した。先生はいつ



もの調子で、「なるほど」とか、「そうですか」とかいつてくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊か拍子抜けの気味であつた。それでもその日私の気力は、因循らしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生々していた。私は青く蘇生ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。

「先生どこかへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持です」

「どこへ」

私はどこでも構わなかつた。ただ先生を伴つて郊外へ出たかつた。

一時間の後、先生と私は目的どおり市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかな葉をぎ取つて芝笛を鳴らした。ある

鹿兒島人を友達にもつて、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であつた。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖ざされたように蒼鬱した小高い一構えの下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に何々園とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになつてゐる入口を眺めて、「はいつてみようか」といつた。私はすぐ「植木屋です」と答えた。

植込の中をうねりして奥へ上ると左側に家があつた。明け放つた障子の内はがらんとして人の影も見えなかつた。ただ軒先に据えた大きな鉢の中に飼つてある金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいつでも構わないだろうか」

「構わないでしょう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅が燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色の丈の高いのを指して、「これは霧島でしょう」といった。

芍薬も十坪あまり一面に植え付けられていたが、まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬畠の傍にある古びた縁台のようなものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余った端の方に腰をおろして烟草を吹かした。先生は蒼い透き徹るような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよく眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹でも同

じ色を枝に着けているものは一つもなかった。細い杉苗の頂に投げ被せてあった先生の帽子が風に吹かれて落ちた。

## 二十七

私はすぐその帽子を取り上げた。所々に着いている赤土を爪で弾きながら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」

身体を半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のままで、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家には財産がよっぽどあるんですか」

「あるというほどありません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

「どのくらいって、山と田地が少しあるぎり、で、

金なんかまるでないでしょう」

先生が私の家の経済いへについて、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであつた。私の方はまだ先生の暮し向きに關して、何も聞いた事がなかつた。先生と知り合いになつた始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑つた。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨あらわな問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思つていつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどうなんです。どのくらいの財産をもつていらつしやるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装なりをしていた。それに家内かないは小人数こにんずであつた。したがつて住

宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢ぜいたくといえないまでも、あたじけなく切り詰めた無弾力性のものではなかつた。

「そうでしょう」と私がいった。

「そりやそのくらいの金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家うちでも造るさ」

この時先生は起き上つて、縁台の上に胡坐あぐらをかいていたが、こういい終ると、竹の杖つえの先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直まっすぐに立てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言ひとりごのようであつた。それですぐ後あとに尾ついて行き損なつた私は、つい

黙つていた。

「これでも元は財産家なんですよ、君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかった。むしろ不調法で答えられなかったのである。すると先生がまた問題を他へ移した。

「あなたのお父さんの病気はその後どうになりました」

私は父の病気について正月以後何にも知らなかった。月々国から送ってくれる為替と共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟であったが、病気の訴えはそのうちにほとんど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えが少しも筆の運びを乱していなかつた。

「何ともいつて来ませんが、もう好いんでしよう」

「好ければ結構だが、——病症が病症なんだからね」

「やつぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合つてゐるんでしよう。何ともいつて来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだまをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかつた。

## 二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つ

ておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「ええ」

私は先生の言葉に大した注意を払わなかった。わたし私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに實際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想してかかるような言葉遣いをするのが氣に触つたら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なものでも、いつ死ぬか分らないものだからね」

先生の口氣は珍しく苦々しかった。

「そんな事をちつとも氣に掛けちゃいけません」  
と私は弁解した。

「君の兄弟は何人でしたかね」と先生が聞いた。

先生はその上に私の家族の人数を聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問いただした。そうして最後にこういつた。

「みんな善い人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもないようです。大抵田舎者ですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなものです。それから、君は今、君の親戚なぞの中に、これといって、悪い人間はいないやうだといいましたね。しかし悪い人間という

一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型いかにたに入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断ぶだんができません」

先生のいう事は、ここで切れる様子もなかった。私はまたここで何かいおうとした。すると後ろうしろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗そぼの傍に、熊笹くまざさが三坪みつばほど地を隠すように茂って生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらとおいの小供こどもが馳かけて来て犬を叱しかり付けた。小供は徽章きしょうの着いた黒い帽子を被かぶったまま先生の

前へ廻まわつて礼をした。

「叔父さん、はいつて来る時、家に誰もいなかったか」と聞いた。

「誰もいなかったよ」

「姉さんやおつかさんが勝手の方にいたのに」

「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日はつて、断つてはいつて来ると好よかったのに」

先生は苦笑した。懷中ふしちゆうから褓口がまぐちを出して、五錢はくどうの白銅はくどうを小供の手に握にぎらせた。

「おつかさんにそういつとくれ。少しここで休まして下さいって」

小供は伶俐りこうそうな眼に笑いを漲みなぎらして、首肯うなずいて見せた。

「今斥候長せつこうちやうになつてるところなんだよ」

小供はこう断つて、躑躅つづじの間を下の方へ駆け下りて行つた。犬も尻尾しっぽを高く巻いて小供の

後を追い掛けた。しばらくすると同じくらいの  
の年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下  
りて行つた方へ駆けていった。

私は妻を残して行きます。私がいなくなつ  
ても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。  
私は妻に残酷な驚怖を与える事を好みません。  
私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。  
妻の知らない間に、こつそりこの世からいなく  
なるようにします。私は死んだ後で、妻から  
頓死したと思われたいのです。気が狂つたと  
思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上にな  
りますが、その大部分はあなたにこの長い自  
叙伝の一節を書き残すために使用されたものと  
思つて下さい。始めはあなたに会つて話をす  
る氣でいたのですが、書いてみると、かえつて  
その方が自分を判然描き出す事ができたよう

な心持がして嬉しいのです。私は酔興に書く  
のではありません。私を生んだ私の過去は、人  
間の経験の一部分として、私より外に誰も語り  
得るものはないのですから、それを偽りなく書  
き残して置く私の努力は、人間を知る上におい  
て、あなたにとつても、外の人にとつても、徒  
労ではなからうと思います。渡辺華山は邯鄲  
という画を描くために、死期を一週間繰り延べ  
たという話をつい先達で聞きました。他から  
見たら余計な事のようにも解釈できましよう  
が、当人にはまた当人相應の要求が心の中にあ  
るのだからやむをえないともいわれるでしょ  
う。私の努力も単にあなたに対する約束を果  
たすためばかりではありません。半ば以上は  
自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。も  
う何にもする事はありません。この手紙があ